

大分大学学術情報拠点（図書館） 所蔵美術品展

（大分大学開放イベント2009 図書館企画）



日名子実三《廃墟》 1920年

期間：2009年10月30日（金）～11月6日（金）

会場：図書館 2階グループ演習室ほか

ごあいさつ

このたび大分大学学術情報拠点（図書館）では、「所蔵美術品展」を開催いたします。

大学とは、教員や学生などの多くの人材が集まり、互いに交流し、それぞれに多様な活動を生み出しつづけている場所です。そのようにして生み出されたものは長い時間の中で徐々に積み重なり、大学の歴史をかたち作っていきます。いまこの時点での、あるいは未来における私たちの大学の個性とは、そうした歴史のうえにこそ成り立つものともいえるでしょう。

図書館には、それらの活動の中で集められた資料やその成果が、モノとして集積されていきます。そのモノの中には、書籍やそのほかの文献・視聴覚資料だけでなく、美術作品と呼ばれるものもふくまれます。

今回の展覧会では、本棚に並んでいる書籍や雑誌とはちがって普段あまり見ていただくことのできない、それらの美術作品をご紹介します。これによって大学の図書館がもつ新たな魅力を発見していただければ幸いです。

そして今回の試みが、それらの作品や資料を後世へと伝えることの意義や、これからの図書館のあり方を考えていくうえでの、ささやかではありますが大切な一歩となることを願ってやみません。

どうぞごゆっくりご鑑賞ください。

学術情報拠点長 伊藤 哲郎

出品目録

※ * 印は本展覧会開催にあたってつけた仮題である

※ 法量の単位は cm。立体作品以外は縦×横とする

〈Ⅰ 日名子実三作《廃墟》〉

01	日名子実三	ひなご・じつぞう	廃墟	1920年(大正9)	h145× w94× d84	石膏・塑造
----	-------	----------	----	------------	----------------	-------

〈Ⅱ 大分の絵画〉

02	佐藤孝任	さとう・こうにん	鶴見秋色*	1937年(昭和12)	64×79	カンバス・油彩
----	------	----------	-------	-------------	-------	---------

03	土居彩畝	どい・さいほ	静物*	年代不詳	69.5×83.3	紙本著色
----	------	--------	-----	------	-----------	------

〈Ⅲ 書にみる豊後の三賢とその周辺〉

04	三浦梅園	みうら・ばいえん	書「監」	1779年(安永8)	32.1×53.7	軸装
----	------	----------	------	------------	-----------	----

05	帆足万里	ほあし・ばんり	書「紅粉青娥映楚雲」	年代不詳	27.0×418.6	卷子
----	------	---------	------------	------	------------	----

06	廣瀬淡窓	ひろせ・たんそう	書「 ^{ようき} 雍熙」	年代不詳	23.4×57.7	額装
----	------	----------	-----------------------	------	-----------	----

07	廣瀬青邨	ひろせ・せいそん	書「樹老夕烟青」	年代不詳	135.9×28.5	軸装
----	------	----------	----------	------	------------	----

08	廣瀬林外	ひろせ・りんがい	書「濛々古雲窟」	年代不詳	106.0×29.4	軸装
----	------	----------	----------	------	------------	----

09	廣瀬 ^{はんじ} 範治(青邨)書状				14.8×252.5	卷子
----	----------------------------	--	--	--	------------	----

10	廣瀬 ^{きゆうべえ} 久兵衛書状				15.8×366.6	卷子
----	---------------------------	--	--	--	------------	----

11	廣瀬 ^{げんべえ} 源兵衛書状				15.9×82.9	卷子
----	--------------------------	--	--	--	-----------	----

12	伊藤圭介先生加来飛霞先生宛書状	いとうけいすけ か く ひ か	全10通および封筒2通		紙全長332.7	卷子
----	-----------------	-----------------	-------------	--	----------	----

[1]16.0×28.0, [2]16.1×31.2, [3]14.4×38.5, [4]14.3×21.2, [5]14.3×29.3, [6]14.2×37.0

[7]14.2×42.5, [8]14.2×26.0, [9]16.7×43.0, [10]16.7×21.6, [11]封筒16.8×10.0, [12]封筒16.1×9.5

参考作品	長岡永邨	ながおか・えいそん	「咸宜園図」複製	1913年(大正2)	28.7×109.4	額装
------	------	-----------	----------	------------	------------	----

I 日名子実三作《廃墟》

第I部では、このたび新しい展示ケースに設置されることとなった日名子実三作《廃墟》を紹介します。

作者の日名子実三は現在の臼杵市に生まれ、朝倉文夫に師事した彫刻家です。本作《廃墟》は日名子が1920年(大正9)27歳のときに作った、現在の日展の前身である帝展の第2回展入選作です。彼の代表作の1つであるとともに、大正期における等身大の石膏全身像の現存例として大変貴重なものです。



01 日名子実三 廃墟 1920年

日名子実三 1893(明治26)～1945(昭和20)

臼杵市生まれ。1918年(大正7)東京美術学校彫刻科を卒業。在学中から朝倉文夫の彫塑塾の塾頭を務め、朝倉を中心とする東台彫塑会にも参加した。19年第1回帝展に初入選。26年朝倉のもとを離れ、齋藤素巖と彫刻家団体「構造社」を結成した。翌年第1回構造社展を開催したのち渡欧、パリを中心にヨーロッパ各地を旅行し、29年(昭和4)に帰国した。32年には帝展に復帰するが、35年「帝展騒動」により反帝展の彫刻家団体「第三部会」を結成。また大正期からメダル制作など、彫刻を社会と結びつけることに力を注ぎ、昭和期には宮崎市の《あめつちのもととはしら八紘之基柱》(1942年)など数多くのモニュメントを制作した。

日名子実三作《廃墟》と大分大学

大学に「廃墟」とは、あまり似つかわしくないようにも思えます。しかも彫刻作品《廃墟》は年老いた男性の全身裸体像です。大学といえば創立者や有名な先生の銅像が建っているというのが一般的なイメージだとすれば、だいぶかけ離れた印象を与えるでしょうか。けれどこの作品は、大分大学にとって、また大分という場所を考えるうえで、とても大切な存在であるともいえるものなのです。

《廃墟》を作った日名子実三は、臼杵に生まれた大分ゆかりの彫刻家です。彼は東京美術学校(現・東京藝術大学)で彫刻を学び、また現在の豊後大野市朝地町出身で近代日本彫刻史を代表する彫刻家朝倉文夫の高弟でもありました。《廃墟》は彼が27歳の1920年(大正9)のとき、第2回帝展に入選した作品です。その前年の第1回帝展で膝を抱えて座る若い女性の全身裸体像《晩春》が初入選し、彫刻家として大きな一歩を踏み出した彼は、この作品では人間の老いに焦点をあてました。それは大正期の自

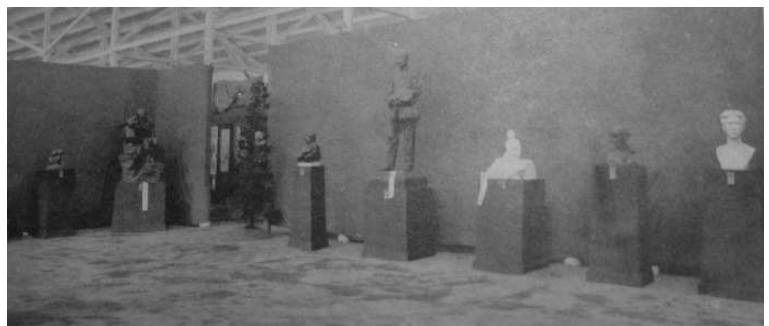


fig.1 1921年第14回九州沖縄八県連合共進会での展示風景

出典：『第十四回九州沖縄八県連合共進会記念写真帖』

(大分県公文書館所蔵)

由な雰囲気の中で、人間の存在を深くとらえようとする若々しく意欲的な制作姿勢といえるでしょう。

この作品の主題については制作当時の日名子自身の言葉がのこっています(『『廃墟』のこと』『美術写真画報』第1巻第10号、1920年11月)。それによれば彼は、平家打倒の計画が発覚して流罪となった僧俊寛のことを思い浮かべて「次第に現実の廃類的な気分が台頭し」、「『生』といふものに愛想をつかした人間の心持」を思ったそうです。そして78歳の老人のモデルを偶然見つけ、その身の上話を1週間ほど聞いて、「彼れが椅子に靠れて物語るその形態から来る現実感と私の主観の共鳴とによつて生れた」作品でした。

翌年、『廃墟』は大分で開催された第14回九州沖縄八県連合共進会の展覧会に出品され、大分の人びとの前に登場しました(fig. 1)。その後大分では、この作品が豊後の戦国大名大友宗麟の、島津氏との勢力争いに敗れたの晩年の姿であるとも伝えられていきます。たしかに「廃墟」という題名は俊寛よりも、キリスト教の国造りを目指して果たせなかった宗麟のほうがしっくりくるようにも思えます。

この作品が大分大学に入った経緯はいまのところ明らかではありませんが、上で述べた大分での展示ののち、そのまま大分にのこされたと考えるのが最も自然であるように思われます。戦後、現在の教育福祉科学部が駄原だのはる(現在、附属校園がある王子キャンパス)にあった頃は、絵画教室の片隅に置かれていました。1962年(昭和37)3月に学芸学部(現・教育福祉科学部)を卒業し、『日名子実三の世界』(2008年)の著書もある広田肇一氏によれば、当時の学生たちはそれをデッサンして勉強したこともあったそうです。

《廃墟》が図書館に移された経緯は不明ですが、1968年(昭和43)の旦野原キャンパスへの移転と関係しているのかもしれませんが。この作品を原型にブロンズ作品が鑄造され、臼杵公園に設置されたのもその頃と思われる。

つまり《廃墟》は、人間を深くとらえようとする若き彫刻家の意欲を表わしていると同時に、それを見た大分の人びとの見方や感性、大分大学の歴史の記憶をその姿に刻んだ像といえるのです。(田中修二)

* 《廃墟》の調査では、広田肇一氏(元大分県立芸術会館副館長)よりご教示をいただきました。

Ⅱ 大分の絵画

第Ⅱ部では、図書館が所蔵する絵画作品から、大分の美術史を語るうえで貴重な2点を展示しています。

1点は明るく強い山の青さが印象的な油彩画です。作者の佐藤孝任は戦前の大分洋画界を代表する画家の1人であり、本学にはこのほかにも彼の手になる肖像画と風景画がのこされています。

もう1点は日本画家の土居彩畝による、みずみずしいぶどうとよく熟れたりんごが鮮やかな色づけの皿とともに描かれた静物画です。戦前の大分で活躍した女性画家の貴重な作品です。



02 佐藤孝任 鶴見秋色* 1937年

佐藤孝任 1889(明治22)～1941(昭和16)

現在の豊後高田市生まれ。東京美術学校と太平洋画会研究所で洋画を学び、大正期には二科展や文展に入選するなど中央の美術界で活躍した。一方でロシア、中国を巡り、中国の大同石仏も調査している。昭和期には大分で活動し、大分大学にも肖像画と風景画計5点がのこる。



03 土居彩畝 静物*

土居彩畝 1891（明治24）～1987（昭和62）

東京浅草生まれ。旧姓中山採子。10歳のとき日本画家荒木寛畝に入門し、15歳で展覧会に入選した。22歳のとき杵築市の土居寛申と結婚、その後京城（現・ソウル）に移り、女学校で教鞭をとる一方、朝鮮美術展覧会に出品した。大分に戻ったのち杵築高等女学校で教職に就く。1937（昭和12）年に結成された青虹社に参加し、県美術協会展にも作品を出品した。晩年は福岡で過ごす。

* 土居彩畝については、きつき城下町資料館よりご教示をいただきました。

佐藤孝任が見た大分の風景

写真(fig. 2)は佐藤孝任が《鶴見秋色》を描いた場所に近いと思われる別府市十文字原からの風景です。手前中央が扇山、奥に鶴見山がむっくりと姿を現わしています。作品が描かれた1937年(昭和12)から72年後の今、時代は変わり、町に暮らす人や建物も変化しましたが、二つの山は変わらず別府の町を見下ろしています。今では別府の中心部から車で30分ほどの場所ですが、この絵が描かれた当時は現在のように道が整備されていなかったでしょうし、車を使うことは稀であったでしょう。苦勞してこの近辺にたどり着いたときに見えた風景、澄んだ空気に、画家は筆をとらざるをえなかったのかもしれません。

佐藤は1889年(明治22)に現在の豊後高田市に生まれました。東京美術学校(現・東京藝術大学)を卒業後、12年間東京で過ごします。1916年(大正5)第3回二科展に水彩《アイヌの児》が入選、翌年の光風会展に油彩《山の夕》を出品、18年には第12回文展に《露西亜の女》が入選します。太平洋画会に所属するなど中央画壇で活躍し、一方で21年に大分で開催された九州沖縄八県連合共進会美術展にも《露西亜の娘》《白根山》を出品しました。また海外を長く遊歴し、ロシアで3年、中国で7年を過ごしたそうです。

彼がいつ大分に帰郷したのかは定かではありませんが、昭和に入ってからと思われます。大分の美術界は大正期後半に入ると新たな美術団体がいくつも起こり活気づいていきます。そうした中、佐藤は1937年(昭和12)絵画団体青虹社に参加しました。また同年11月に開催された第1回大分県美術協会展に《アイヌ酋長》と《鶴見秋色》を出品しています。今回展示する油彩の風景画には画面右端に赤い絵具で「昭和十二年九月」とあります。モチーフや制作された時期からみて、同展出品作《鶴見秋色》と同一とも考えられ、今回は仮題として同じ題名を用いました。

《鶴見秋色》は彼の晩年、亡くなる4年前の作品です。そこには澄んだ初秋の空に山々が連なり、開け放たれた野に風が吹くのどかな風景が描かれています。都会と外国での生活を通して彼の眼に故郷大分の風景はどのように映ったのでしょうか。

(藤原由莉)



fig. 2 十文字原から見た鶴見岳

Ⅲ 書にみる豊後の三賢とその周辺

第Ⅲ部には、江戸時代から明治初期に書かれた、大分ゆかりの書作品と書簡を展示します。

江戸時代の大分は、のちに「豊後の三賢」とうたわれた三浦梅園、帆足万里、廣瀬淡窓など数多くのすぐれた学者・文化人を輩出しました。図書館には彼ら三賢をはじめとして数点の書作品が所蔵されています。

また廣瀬家の人びとや、帆足万里に学んだ植物学者加来(賀来)飛霞宛の伊藤圭介の書状は、これまでほとんど公開されていない貴重なものです。



04 三浦梅園 書「監」 1779年

三浦梅園 1723（享保8）～1789（寛政元）

現在の安岐町に医師の長子として生まれ、杵築藩の綾部綱斎(天文学者麻田剛立の父)、中津藩の藤田敬所に学ぶ。以後自宅で独学を続け、西洋の科学知識も学びつつ「条理学」と呼ばれる独創的な哲学理論を展開した。主著に自然哲学の書『玄語』がある。また脇蘭室をはじめ全国から集まった多くの弟子を指導した。

「監／日監在茲／安永己亥皐月応需書／二子山三浦晋／印 印」



05 帆足万里 書「紅粉青娥映楚雲」

帆足万里 1778（安永7）～1852（嘉永5）

儒者。日出藩家老の第三子として生まれる。脇蘭室、亀井南溟らに師事。三浦梅園の影響を受け、亀井昭陽、廣瀬淡窓らと親しく交友した。1804年藩学教授となり、32～35年には家老として藩政改革に取り組んだ。多くの著書をのこし、家塾で賀来飛霞らを育てた。

「紅粉青娥映楚雲桃花馬上石榴裙羅敷獨向東方去漫学他家作使君銅臺客觀委灰塵魏主園陵漳水濱即今西望猶堪思況復當時歌舞人 萬里書」



06 廣瀬淡窓 書「雍熙」 「雍熙 廣建 印 印」

廣瀬淡窓 1782（天明2）～1856（安政3）

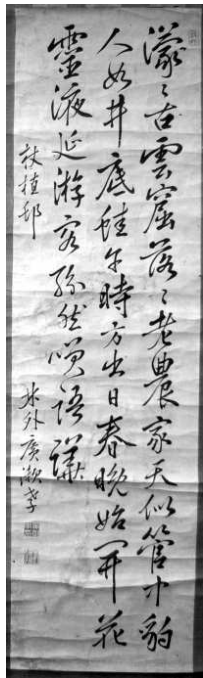
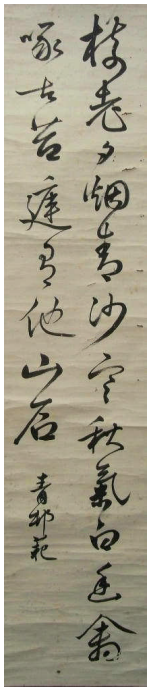
豊後国日田生まれ。儒学者、漢詩人。1797年から福岡の亀井南溟、昭陽父子に学び、99年に病のため帰郷。その後独学を続け、「敬天思想」を論じた。1805年私塾を開き、17年に咸宜園^{かんぎえん}を創設、大村益次郎ら多くの弟子がそこで学んだ。



参考作品 長岡永邨 「咸宜園図」複製

長岡永邨 1851（嘉永5）～1918（大正7）

日田豆田町に生まれ、若い頃から絵をよくし、平野五岳の絵に学んだ。揚州とも号した。2人の息子も画家として活躍。



左：07 廣瀬青邨 書「樹老夕烟青」

「樹老夕烟青沙定秋氣白幽余／啄古苔庭有他山石 青邨範」

廣瀬青邨 1817（文政14）～1884（明治17）

現在の中津市生まれ。通称範治。1834年廣瀬淡窓に入門、のちに熊本で医学を学ぶ。淡窓の養子となり、55年咸宜園の塾政を継いだ。62年に廣瀬林外に塾政を譲り、府内藩の藩校の教頭となる。明治維新後は京都や岩手で官僚として活躍し、東京では咸宜園出身の長三洲とともに修史局に出仕した。その後東京で家塾を開く。

右：08 廣瀬林外 書「濛々古雲窟」

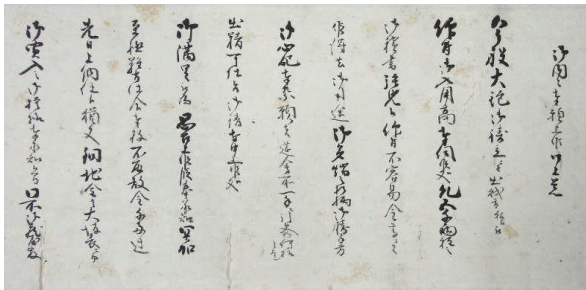
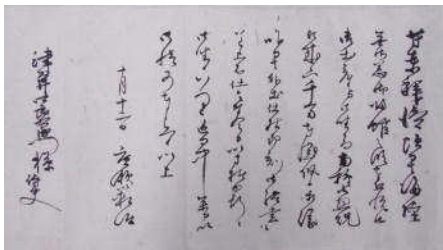
「濛々古雲窟落々老農家天似管中豹／人如井底蛙午時方出日春晚

始開花／靈液延游客紛然喚語譁／杖植邨 林外廣瀬孝 印 印」

廣瀬林外 1837（天保8）～1874（明治7）

日田の人。父は廣瀬旭莊。伯父淡窓に養われ、咸宜園で学んだ。のちに青邨に代わり咸宜園の4代塾主を務め、明治維新の動乱期における塾の経営を担った。その後洋学を学ぶため上京し、修史館につとめた。明治初年には日田県知事松方正義の要請で「学制ノ儀」を起草した。

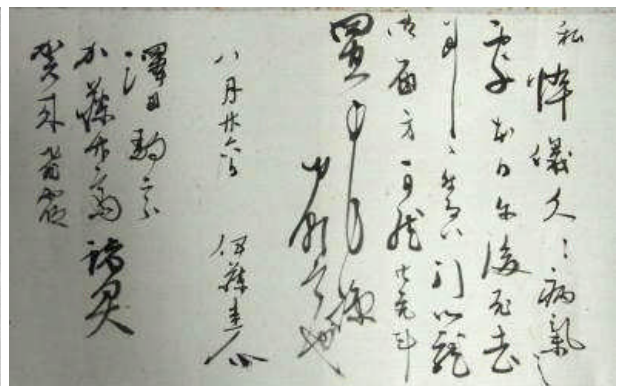
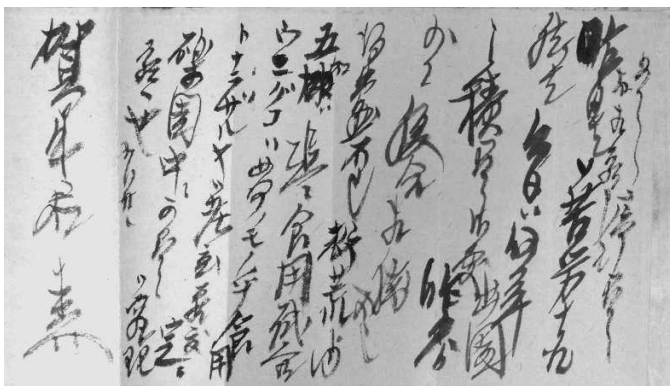
←09 廣瀬範治(青邨)書状



10 廣瀬久兵衛書状 部分

11 廣瀬源兵衛書状 部分

※廣瀬久兵衛は淡窓の弟で日田の豪商・廣瀬宗家第六世。源兵衛はその息子で廣瀬宗家第七世



12 伊藤圭介先生加来飛霞先生宛書状

[8通目]

[1通目]

※伊藤圭介は名古屋の植物学者。加来飛霞は現在の宇佐市に生まれ、帆足万里に学んだ植物学者

図書館所蔵の書について

ここでは第Ⅲ部に展示された書の主なものについて説明します。

三浦梅園の書は一文字だけ大きく書かれた「監」の字に気迫が感じられます。ぐうっと入った起筆の一面目と、ぐぐぐと押えられた最終画によって、その一文字が重厚に表現されていて、「かんがみる」という態度がどっしりとかまえて沈思黙考する姿のようにも見えます。

帆足万里の書にはおもしろいリズムが感じられます。たとえば三文字目の「青」では図太い横画が目立ち、筆を深く沈める様子がうかがえ、しかし次の「娥」では切るような線で勢いよく書かれています。一定のリズムで運筆するのではなく、一文字ごとに変化をつけることによって表現された力強い行書です。

廣瀬淡窓の書はすっきりとした行書です。「^{ようき}雍熙」とは「やわらぎたのしむこと」。この書は中国初唐時代の書家^{おうようじゆん}欧陽 詢(557～641)の「^{きゆうせいきゆうれいせんめい}九成宮醴泉銘」のような背勢(相対する二本の縦画が背きあうように書くこと)で書かれていますが、「九成宮醴泉銘」のような緊張した張りつめた線ではなく、「雍熙」という言葉通りの温かさや明るさが感じられます。

廣瀬青邨の書は静かな行書です。淡窓の書とは逆に向勢(相対する二本の縦画が向き合い、そとに張り出すように書くこと)で書かれていて、秋の庭の寂しげな様子がよく表現されているといえるでしょう。

廣瀬林外の書は中国晋代の書家^{おうぎし}王羲之(307～365)の「^{らんていじよ}蘭亭序」のような書風の行書です。全体的に細い線ではあるのですが、骨のあるぴりっとした印象で、一行目の「老」や「農」などの左はらいの潔さがこの書を爽やかな表現にしています。

淡窓や青邨、林外の書風は全体的にすっきりとしていて、どこかに通じ合うものも感じられます。

伊藤圭介(1803～1901)の書状は賀来(加来)飛霞(1816～1894)に宛てられたもので、1879年(明治12)に圭介の三男謙が亡くなったことなど私的なものも含まれています。名古屋の本草学者であった圭介は飛霞の兄佐之(1799～1857)と長崎で出会い、同じく本草学者であった佐之・飛霞兄弟と深い親交をもちました。兄の佐之とともに帆足万里に医学と本草学(薬用とする植物や動物、鉱物を研究する学問)を学び、近代植物学に大きく貢献した飛霞は、圭介とともに幕末の三大本草学者の一人に数えられています。

このような書状は作品として書いたものではないため読みにくい部分も多いのですが、書いた人の自由な運筆を見ることができ、その人の感情がその書のなかに表われやすくなっています。伊藤圭介の書状でも、落ち着いて書かれたものもあれば、急いで書いたのか荒々しいものもあり、また筆の感覚を楽しむかのような躍動した線も見られます。日常の文章として書かれた実用的な書であっても、そのときどきの筆者の様子や思いが感じられれば、書としておもしろく鑑賞できるのではないのでしょうか。(小野早百合)

* 書の調査では、平野廣霞氏(書家)、古賀道夫氏(大分県立芸術会館学芸員)、鳥井裕美子氏(教育福祉科学部教授)よりご教示をいただきました。

大分大学学術情報拠点(図書館)所蔵美術品展図録

発行： 大分大学学術情報拠点(図書館) 〒870-1192 大分市大字旦野原700番地
2009年10月30日

協力： 大分大学教育福祉科学部美術史研究室[田中修二(准教授)・藤原由莉(大学院2年)・小野早百合(大学院1年)]